

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第7号

「ままごと」の新聞は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2013年8月10日
発行元：ままごと

「街と演劇」

「日本の大人」はじまります

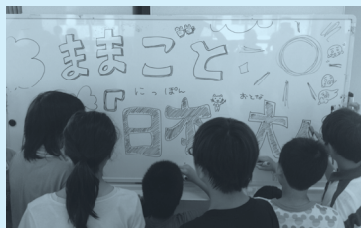
柴 幸男 Yukio Shiba

今回、書きたいことが二つあります。まず、はえぎわ『ガラパゴスバコス』への出演。そして『日本の大人』稽古のこと。

はえぎわのことは、この下でノゾエさんが詳しく語ってくれていると思いますので、短めに。公演が終わって思っているのは、本当に出演させてもらってよかった、の一言です。ノゾエさんの演出は、とても静かでした。その声や表情が一番記憶に残っています。演出家には苦しい瞬間、孤独な時間があります。だけど、ノゾエさんは冷静に、役者に、芝居に向き合い続けました。少なくとも、僕にはそう見えました。僕にはそれがとても衝撃で、静かにノゾエさんのことを尊敬していたと思います。その敬意は、演技として、自分の持てる力を出し切ることで、表明したつもりです。演劇を営む人間として、とても幸福な時間を送らせてもらいました。あれから、演出家として、劇作家としての自分を、ずっと考えています。

その思案の中ではじまったのが、『日本の大人』の稽古です。この作品は、小学生と大人と一緒に楽しめるという挑戦作になります。そして、もう一つ、この芝居には個人的な挑戦があります。それは、劇作家がつくる作品にしたいということ。最近の、自分の作品は演出家の作品だった、僕は思っています。

でも、今回は、そうはしなくなかった。まず、劇作家として、考えぬくこと、紙の上から生ま



看板に落書きする名古屋の小学生



豊橋での小学校WSの風景です



小豆島では幼稚園で稽古しました



海の前で宿泊しました



公開稽古用に看板を手作り

れる作品にしたかったのです。というわけで、普段は戯曲がなければ、まずは稽古場で俳優たちに、実際に動いてもらったり、うなづけてもらったりするわけですが、今回はその時間を、一人でノートの前でうなる時間にしました。だけどノートの前で一人であらうなっている、アイデアはまったく生まれません。僕は、いつの間にか稽古場での思考、演出家としての思考に慣れたしまったようでした。だから、最初はなぜ自分が書けないのか、何が引っかかっているのかを、ただひたすらノートに書いていました。頭に流れる雑念をずっと書き留めているうちに、戯曲へのヒントが生まれます。その方法以外に、戯曲を生み出す方法はありませんでした。書き始めれば、必ず引っかかります。その引っかかりの原因を逃けずに、追いつめていく。漠然とし

た不満が、具体性を帯びて、問題として表出する、そしてようやく解決の糸口が見えてくる。この孤独な作業こそが、劇作家の仕事でした。という文章を、僕は今、小豆島の合宿先の、今はもう使われなくなった幼稚園で書いています。2週間弱あった合宿稽古もおしまいです。僕は、ほぼ毎日、この幼稚園で生活していました。朝起きて作業をして、お昼に稽古して、ご飯とお風呂に宿に戻って、そして、幼稚園の職員室で作業をしました。周囲には何もなくて、夜は暗く、一人きりでした。考える、という行為は一人でしか出来ません。自分の中から何かを絞り出すしかなくて、僕は、久々にその作業に没頭できていることを今、ここで、うれしく思っています。

稽古の中で印象に残っているのは、愛知県で行った小学校でのワークショップと試演会です。なんとかつくった20分を小学生たちに実際に観てもらいました。この時の経験が、僕は、とても爽快で、久しぶりに自分が何のために演劇をやっているのか、思い出したような気分になりました。彼らの反応はとても早い。面白い、面白いです。つまらなければ飽きます。ただ、

その変化がとても早い。僕は、たどつつまらないう時間があってももうしばらくは何か面白いことが起こるかもしれないと待つことができそうです。でも、彼らにとってのその時間はとにかく短く、僕から見ればほとんどない。今、面白いことが、劇的なことが、起こっているかどうか、重要なんだ、と思いました。彼らの鮮やかな反応を、真横で体感しながら、僕はお客さんに反応される作品がつくりたいとあらためて思ったのでした。単純に言えば、笑ってほしいと思いました。驚かせたいと思いました。今まで、自分がつくりたいものをつくってききました。いや、自分がつくれるものをつくってききました。人の作品や、人の評価を気にしてつくってききました。だけど、いま、僕は、彼らにうけたいと素直に思っています。

Yukio Shiba 82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドミニ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞。同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

最初の一步 ノゾエ征爾

from 東京

人は、観たこともない劇団からの主演オファーを引き受けるものでしょうか。

そもそも人は、役者でもない人に、主演オファーをするものでしょうか。

あまり聞かない事柄ではありますが、実際それは現実としてありまして、前者は柴くんであり、後者は僕であります。

はえぎわ本公演『ガラパゴスバコス』のことでした。

柴くんは当然言いました。「僕役者もやらないのに、なぜ、僕なのでしょう？」

ノゾエは答えました。「アフタートークで話しているの観たことあって、それで、なんか、いいなと思っていて」柴くんは数日考えあぐね、出演を引き受けてくれました。「いいかもと思っ

そう、この不安にまみれた事象を押し進めたのは、それぞれの、「いいかも」というなんとも不確かな感覚のみだったと思います。

「いいかも」。自分のその感触を信頼するしかないし、作品づくりは、その積み重ねだと思っています。いいかもを一つ見つけては次のいいかもを探す。

最初からゴールを明確にして、そこに向かうのではなく、現場の者たちで時間をかけてその「いい」を探し、共有していく。最後に、お客さんとも共有できた時、そこでようやく初めて、やつぱこれ「いい」よね？と確認できるのです。

いくらでも遠回りのできる長い道程ではありますが、そこへ至るまでの「いいかも」からの最初の一步。これを柴くんと共に踏み出したことが、やはりとても大きなことであつたし、この公演での喜びの一つでありました。が、柴くん自身はどうだったのか、打ち上げでは女性の話ばかりして終わってしまったので、まだ聞けていません。

のぞえ・せいじ

劇作家、演出家、俳優、はえぎわ主宰。99年「はえぎわ」を始動。以降、全公演にて脚本、演出、出演。12年「〇〇トアル風景」にて第56回岸田國士戯曲賞受賞。